



Intel® Command Line Interface

ユーザー ガイド

Intel Command Line Interface バージョン 2.3

著作権情報

本資料に掲載されている情報は、インテルが開発したサーバー ボードおよびシステムをサポートする目的でインテル® 製品に関連して提供されています。本資料は、明示されているか否かにかかわらず、また禁反言によるとよらずにかかわらず、いかなる知的財産権のライセンスを許諾するためのものではありません。製品に付属の売買契約書『Intel's Terms and Conditions of Sale』に規定されている場合を除き、インテルはいかなる責を負うものではなく、またインテル製品の販売や使用に関する明示または黙示の保証(特定目的への適合性、商品性に関する保証、第三者の特許権、著作権、その他、知的所有権を侵害していないことへの保証を含む)にも一切応じないものとします。インテル製品は、医療、救命、延命措置、重要管理や安全システム、核施設などの目的への使用を前提としたものではありません。

インテルは、随時予告なしに仕様および製品の説明を変更することがあります。設計者は、機能または命令の一覧で「留保」または「未定義」と記されているものがありますが、その「機能が存在しない」あるいは「性質が留保付である」という状態を設計の前提にしないでください。これらの項目は、インテルが将来のために留保しているものです。インテルが将来これらの項目を定義したことにより、衝突が生じたり互換性が失われたりしても、インテルは一切責任を負いません。本書の情報は予告なく変更されることがあります。この情報を使用して設計を完結しないでください。

本書に記載されている製品には、製品を仕様書から逸脱させ得るエラッタと呼ばれる設計上の不具合を含む場合があります。請求して頂ければ現在判明している正誤表が利用できます。

製品を発注する前に最寄りのインテルの販売オフィスまたはディストリビューターに連絡して、最新の仕様を取得してください。

Intel、Intel Core、および Xeon は、米国および他の国における Intel Corporation の商標です。

* その他の製品名またはブランドは各所有者に帰属します。

Copyright © 2004–2007 Intel Corporation. All rights reserved.

目次

はじめに	1
認証および暗号化のサポート	2
Intel® Command Line Interface の特徴と利点	2
Serial over LAN (SOL) モード	3
最新情報の取得方法	3
Intel® Command Line Interface の使用	4
プラットフォーム・コントロール・モード (dpccli)	5
プラットフォーム・コントロール・モードと SOL モードで telnet を使用する場合	5
コンソール・インタフェース	7
dpccli のリターン コード	7
dpccli 設定ファイル	8
HOME 環境変数の設定	9
dpccli コマンドの構文	9
スクリプトから dpccli コマンドを実行する	12
コマンド参照情報	14
一般的なコマンド	14
alarm -s	14
alarm -q	15
alarm -c	17
boot 17	
clearlog	18
console	18
displaylog	19
exit または quit	19
ヘルプ 20	
id 20	
Identify	20
interrupt	21
power	21
リセット	22
センサー	22
service	23
set -T session {Prompt Prefix}	24
shutdown	25
version	25

ファームウェア設定コマンド.....	25
プラットフォーム別のチャンネル ID マッピング.....	26
get -T BMC/network	27
get -T BMC/channel.....	28
get -T BMC/lanAlert.....	28
get -T BMC/lan.....	28
get -T BMC/modem	28
get -T BMC/terminal	29
get -T BMC/serialPage.....	29
get -T BMC/serialDialString.....	29
get -T BMC/serial	29
get -T BMC/pefFilter	29
get -T BMC/pefPolicy	30
get -T BMC/sol	30
get -T BMC/user/<user id>	30
get -T BMC/prp	30
get -T BMC/channelInfo	30
set -T BMC/channel.....	31
set -T BMC/lanAlertEnable.....	32
set -T BMC/lanAlert.....	32
set -T BMC/lan.....	33
set -T BMC/serialEnable	34
set -T BMC/modem	34
set -T BMC/terminalEnable	35
set -T BMC/serialPageEnable	35
set -T BMC/serialDialString.....	36
set -T BMC/serialPageConf.....	36
set -T BMC/serial	36
set -T BMC/pefFilter.....	39
set -T BMC/pefPolicy	39
set -T BMC/solEnable	40
set -T BMC/user.....	40
set -T BMC/userPrivilege	41
set -T BMC/userEnable.....	41
set -T BMC/prp	41
commit	41
clear	42

ネットワーク・プロキシ (dpcproxy) について 43

ネットワーク・プロキシ用の Persistent 引数を変更する	43
Windows の場合	44
Linux の場合	44

インストールしたネットワーク・プロキシーを手動で起動する	44
Windows の場合	44
Linux の場合	45
dpcproxy コマンドの構文	45

はじめに

Intel® Command Line Interface には、プラットフォーム・コントロール・モードおよび Serial over LAN (SOL) コンソール・リダイレクション・モードの 2 つのモードがあります。Intel Command Line Interface がプラットフォーム・コントロール・モードの場合、リモート システムに対してコマンドを発行できます。Intel Command Line Interface が SLI コンソール・リダイレクション・モードの場合、リモート コンソールの出力を含むリモート システムのコンソールで可能なすべてのアクティビティを LAN 接続経由で実行することが可能です。SOL では、サーバーのシリアル ポートから出力されるデータを LAN 経由でリダイレクトすることができます。

Intel Command Line Interface は、管理クライアント・システムまたは中央ネットワーク・プロキシ上で実行されるネットワーク・プロキシ (dpcproxy) を使用します。ネットワーク・プロキシは、インテル サーバーに同梱の Intel System Management のインストール・プログラムによってインストールされます。

ネットワーク・プロキシを通してリモート サーバーに Intel Command Line Interface コマンドを発行するには、*dpccli* というコンソール・インターフェイスを使用する方法と、telnet を使用する方法の 2 つの基本的な方法があります。このセクションでは、この 2 つの方法の詳細を説明します。

注

Intel Command Line Interface を SOL モードに切り替えるには、リモート サーバーに対して telnet 接続を使用していなければなりません。リモート サーバーに Intel Command Line Interface コマンドを発行するために dpccli を実行している場合、SOL モード (または Intel Command Line Interface コマンドの使用や、SOL モードでリモート サーバーを起動するオプションの使用) に切り替えることはできません。

Intel Command Line Interface と SOL では、Windows Hyperterminal はサポートされていません。

dpccli という Intel Command Line Interface のコンソールは管理コンソール上で実行され、管理コンソールとネットワーク・プロキシ (管理対象サーバーと通信する) の間の通信を行います。(dpccli の詳細については、5 ページを参照してください。)

Intel Command Line Interface コマンドの発行および SOL モードでの実行目的で telnet でリモート サーバーに接続する場合には、telnet コマンドラインで dpcproxy がリスンしているポートを指定して dpcproxy に telnet セッションを接続しなければなりません (必要な telnet の構文については、5 ページを参照してください)。

dpccli を使用した Intel Command Line Interface セッションでは、dpccli コマンドへの引数として渡すことができるサーバー名 (アドレス) およびログイン (ユーザー名およびパスワード) が必要です。

dpccli を介した Intel Command Line Interface セッションが実行され、目的のサーバーへの接続が確立されれば、dpccli プロンプトでそのサーバーに対して Intel Command Line Interface コマンドを発行し始めることができます。telnet を使用して接続する場合、プラットフォーム・コントロール・モード (デフォルト) の場合と同じ dpccli プロンプトが表示され、telnet 経由の dpccli プロンプトで Intel Command Line Interface コマンドが発行できます。

認証および暗号化のサポート

Intel Command Line Interface は、接続先サーバー上で使用されている IPMI のバージョンに応じて、IPMI 1.0/1.5 および IPMI 2.0 をサポートします。IPMI 1.0/1.5 を使用して通信している場合、Intel Command Line Interface はパケットの認証に MD2 アルゴリズムを使用します。IPMI 2.0 を使用している場合、Intel Command Line Interface はパケットの認証に HMAC-SHA1 アルゴリズムを使用します。どのパケットを認証するかは指定できません。

Intel Command Line Interface は IPMI 1.0/1.5 で通信しているか IPMI 2.0 で通信しているかによって、異なる暗号化アルゴリズムをサポートします。IPMI 1.5 では SOL パケットのみが暗号化されます。デフォルトでは、すべての SOL パケットが暗号化されます。IPMI 2.0 では、すべてのパケットが暗号化可能です。この場合、AES-CBC アルゴリズムがパケットの暗号化に使用されます。

デフォルトでは、認証されたパケットのみが暗号化されます。しかし、すべてのコマンドを暗号化したり、まったく暗号化しないように Intel Command Line Interface を設定することも可能です。暗号化の設定を含む、dpccli コマンド構文の詳細については、45 ページを参照してください。

Intel® Command Line Interface の特徴と利点

Intel Command Line Interface では、グラフィカル・ユーザー・インターフェイス (GUI) ではなく、コマンドラインからサーバーのコントロールができます。コマンド プロンプトで、またはスクリプト ファイルから Intel Command Line Interface コマンドを入力することによって、次のようなことができます (包括的なリストではありません。全ての Intel Command Line Interface コマンドの一覧については 12 ページを参照してください)。

- サーバー電源をリモートでオン/オフする
- サーバーをリモートでリセットする
- コンピューターの ID を要求する
- センサーの値を表示する
- BMC のネットワーク構成を表示する
- IPMI 1.0、1.5、および 2.0 認証をサポートする
- IPMI のバージョンに基づいてパケットを暗号化する

また、Perl スクリプトを実行することによって、複数のリモート サーバーに対するコマンドを発行できます。さらに、次のいずれかのコンソールを使用して、dpccli または telnet を起動し、Intel Command Line Interface コマンドを発行することもできます。

- Windows のコマンドライン環境 (コマンド プロンプト)
- Linux のコマンド シェル

Serial over LAN (SOL) モード

Intel Command Line Interface の Serial over LAN¹ コンソール・リダイレクション・モードでは、ユーザーに意識させずに、ベースボード UART からのシリアル文字ストリームを、LAN 経由で管理するクライアント・システムにリダイレクトしたり、その逆方向にリダイレクトします。シリアル・インターフェイス に比べて、Serial over LAN には次のような利点があります。

- シリアル コンセントレーターが要らない
- ケーブル数が減る
- ビデオ、マウス、キーボードなしでサーバーをリモート管理できる (ヘッドレス サーバー)

注

dpccli インターフェイス では書式化された出力をサポートしていません。SOL コンソール・リダイレクション・モードで Intel Command Line Interface を使用する場合、特殊文字はサーバー コンソールでの表示と異なり、正しく書式化されずに表示されることがあります。SOL データを表示するには、*telnet* を使用した接続を確立する必要があります。

最新情報の取得方法

システム要件やサポートされている OS など Intel Command Line Interface の最新情報については、Intel System Management 又は Intel Server Management のソフトウェア CD に収められている『リリース ノート』を参照してください。

¹ Serial over LAN モードは、National Semiconductor PC87431x 系列の「ミニ」BMC を使用するシステムではサポートされていません。

Intel® Command Line Interface の使用

Intel Command Line Interface コマンドをリモート サーバーに発行する基本的な方法としては、dpccli 経由と telnet 経由があります。以下にそれぞれの方法について説明します。

SOL モードで Intel Command Line Interface を使用する場合、telnet 経由でリモート サーバーに接続する必要があります。dpccli 経由では SOL モードはサポートされていません。しかし、接続の方法に影響を与える dpccli コマンドライン・オプションは telnet 経由の接続時には利用できません。これは、telnet を使用しているときは、dpccli コマンドを使用していないからです。したがって、そのサーバーで何を実行するのかによって、使用する方法を決定しなければなりません。dpccli コマンドとそのオプションの詳細については、6 ページを参照してください。

注

サポートされているバージョンの Linux を実行している管理コンソールから Intel® Command Line Interface の Serial over LAN コンソール・リダイレクション・モードを使用する場合、Backspace キーは機能しません。代わりに `Ctrl + Backspace` キーを使う必要があります。

注

プラットフォーム・コントロール・モードと SOL モードでは²、ともにリモート管理対象サーバーとの通信にネットワーク・プロキシを使用します。これは、このマニュアルで説明している telnet コマンド (5 ページを参照) が、ネットワーク・プロキシ dpcproxy がリッスンしているポートである 623 ポートを telnet ポートとして指定しているからです。

注

dpccli または telnet を使用する場合、1 つのサーバーに対して 4 つの接続しか同時に確立できません。これは、dpcproxy が直接リモート サーバーの BMC に接続しており、BMC が同時接続を 4 つまでしかサポートしていないからです。5 つ目の接続を試みると、パスワードの入力後およそ 15-20 秒間次のメッセージが表示されます。

パスワードが無効です。
接続に失敗しました。

その後、オペレーティング・システムのプロンプトが表示されます。他のアプリケーション (システム・マネジメントなど) からそのサーバーへの帯域幅外の接続はいずれも、そのサーバーの BMC への 4 つの総接続数の 1 つとしてカウントされます。

² Serial over LAN モードは、National Semiconductor PC87431x 系列の「ミニ」BMC を使用するシステムではサポートされていません。

プラットフォーム・コントロール・モード (dpccli)

注

dpccli で *Intel Command Line Interface* セッションを開始するには、管理コンソールまたは中央ネットワーク・プロキシ・システムで、ネットワーク・プロキシ *dpcproxy* が実行されていなければなりません。しかし、デフォルトでは何もしなくてもネットワーク・プロキシが実行されています。これは、インストール時に、ネットワーク・プロキシがインストールされ、再起動の際に自動的に開始するように設定するからです。ネットワーク・プロキシの詳細については、43 ページを参照してください。

Windows のコマンド プロンプトを使用する場合

プラットフォーム・コントロール・モードに接続して *Intel Command Line Interface* コマンドを使用するには、次の手順に従います。

dpccli コマンドを入力して、任意のコマンドライン・オプションを入力します (9 ページを参照)。

Server:プロンプトで、接続先サーバーの IP アドレスまたは DNS 名を入力します。

接続先システムの BMC ユーザー名およびパスワードを入力します。

認証の実行後に、「ログイン成功」のメッセージと *dpccli>* プロンプトが表示されます。これで、*Intel Command Line Interface* コマンドが入力できます。

Linux シェルを使用する場合

プラットフォーム・コントロール・モードでサーバーに接続し、Linux コマンドライン・シェルから *Intel Command Line Interface* コマンドを使用するには、次の手順に従います。

次のコマンドを入力して、任意のコマンドライン・オプションを入力します (9 ページを参照)。

```
/usr/local/cli/dpccli
```

Server:プロンプトで、接続先サーバーの IP アドレスまたは DNS 名を入力します。

接続先システムの BMC ユーザー名およびパスワードを入力します。

認証の実行後に、ログイン成功のメッセージと *dpccli>* プロンプトが表示されます。これで、*Intel Command Line Interface* コマンドが入力できます。console コマンドを使って SOL コンソール・リダイレクション・モードに切り替える場合は、以下のプラットフォーム・コントロール・モードと SOL モードで telnet を使用する場合で説明されるように、まず管理対象サーバーへの telnet セッションを開始する必要があります。

プラットフォーム・コントロール・モードと SOL モードで telnet を使用する場合

注

サポートされているバージョンの Linux を実行している管理コンソールから *Intel Command Line Interface* の Serial over LAN コンソール・リダイレクション・モードを使用する場合、Backspace キーは機能しません。代わりに *Ctrl + Backspace* キーを使う必要があります。

Serial over LAN モードでは³、管理するコンソールからネットワーク・プロキシ・サーバーへの telnet セッションが必要です。これには、双方のシステムで実行しているオペレーティング・システムの種類 (Windows または Linux) には関係がありません。以下の手順で、リモート サーバーへの telnet セッションを開始してください。

オペレーティング・システムのコマンド プロンプトで、「telnet xxx.xxx.xxx.xxx 623 <Enter>」と入力します。xxx はネットワーク・プロキシを実行しているシステムの IP アドレスです。これは、プロキシがインストールされている中央ネットワーク・サーバーのこともあります。ローカル システムに接続する場合は、システムの IP アドレスではなく「localhost」を使用してください。623 は Intel Command Line Interface 接続に必要なデフォルト・ポートアドレスです。dpcproxy コマンドの実行時にこのポート アドレスが変更された場合は、変更後のポート アドレスを使用します (dpcproxy の構文は 45 ページを参照)。

例:

```
telnet 10.7.162.58 623
```

または

```
telnet localhost 623
```

Server:プロンプトで、接続先サーバーの IP アドレスまたは DNS 名を入力します。

接続先システムの BMC ユーザー名およびパスワードを入力します。

認証の実行後、ログイン成功のメッセージと dpccli> プロンプトが表示されます。telnet 経由であっても、Intel Command Line Interface はデフォルトでプラットフォーム・コントロール・モードで開始します。これで、Intel Command Line Interface コマンドの入力 (コマンド一覧については 12 ページを参照) か、または、以下に説明するように SOL コンソール・リダイレクション・モードに切り替えることができます。

注

SOL 接続経路でリモート サーバー上の BIOS セットアップ・ユーティリティを使用する場合、F10 を押して BIOS セットアップ・ユーティリティを終了するとリモート サーバーへの SOL 接続が失われるので、そのサーバーへの SOL 接続を再度確立する必要があります。

プラットフォーム・コンソール・モードと SOL コンソール・リダイレクション・モード間の切り替え

上述のように telnet を使用してネットワーク・プロキシ経由でリモート サーバーへ接続する場合、Intel Command Line Interface セッションはプラットフォーム・コントロール・モードで開始し、Intel Command Line Interface コマンドをリモート サーバー上で実行できます。SOL コンソール・リダイレクション・モードに切り替えるためには、Intel Command Line Interface コマンド「console」を発行します (18 ページを参照)。SOL コンソール・リダイレクション・モードを終了してプラットフォーム・コントロール・モードに戻るには、チルダに続いてピリオドを入力します (~)。これで、コンソールがプラットフォーム・コントロール・モードに戻ります。dpcproxy コマンドの redirectexit オプションを使って、モードを切り替えるために文字の順序を変えることもできます (dpcproxy コマンド構文の詳細については、45 ページを参照)。

³ このコマンド オプションは、National Semiconductor PC87431x 系列の「ミニ」BMC を使用するシステムではサポートされていません。

コンソール インターフェイス

コマンド・プロンプト・コンソールでは、Intel Command Line Interface コマンドにアクセスする前に `dpccli` を起動する必要があります。`dpccli` 実行ファイルは、コンソールとネットワーク・プロキシ間のインターフェイスとして働きます。このインターフェイス が起動すると、サーバーに接続してコマンドを入力することが可能になります。

コンソール インターフェイス は、標準的なコンソールの入出力を使用するスクリプト環境において特に便利です。また、書式化された出力が必要でない場合は、単なるインタラクティブ インターフェイス として使用できます。

`dpccli` のリターン コード

セッションを終了する際、`dpccli` はステータス コードを返します。`dpccli` セッション中、通常の終了は Intel Command Line Interface コマンドの「`exit`」または「`quit`」(19 ページを参照)で行われます。ネットワーク・プロキシ (`dpcproxy`) を呼び出す際に `-e` オプションを使用した場合はエラーが発生すると `dpccli` は異常終了します。`-e` オプションを使用しないと、最後のリターン コードのみが表示されます。つまり、セッション中に複数のエラーが発生した後に通常の終了を行うと、最後のエラーのリターン コードしか表示されません。

ネットワーク・プロキシに対して `-e` オプションを設定するには、`persistent` 引数の設定に関する情報の 43 ページを参照してください。`persistent` 引数とは、再起動時にネットワーク・プロキシが再開するたびに読み込まれる引数です。

`exit` または `quit` コマンドの入力による、あるいはエラーの発生による `dpccli` の終了時にリターン コードを表示するには、ご使用のオペレーティング・システムに応じて、コマンド プロンプトで次のいずれかのコマンドを入力してください。

```
Linux:echo $?
```

```
Windows:echo %errorlevel%
```

次の表に `dpccli` が返すステータス コードを示します。0 以外のエラーコードは何かエラー状況が発生したことを意味します。

コード	意味	推奨する対応
0	成功	対応の必要はありません。
1	プロキシーへの接続が失われました	dpccli セッションまたは telnet セッションを再起動してください。
2	ログインに失敗しました	再度ログインしてください。
3	コマンドを認識できません	コマンドを再度入力してください。このエラーは、コマンドの入力ミスがあった場合に表示されます。
4	コマンドに失敗しました	コマンドを再入力します。ネットワーク・プロキシーを再起動してからコマンドを再試行する必要がある可能性があります。
5	引数が無効です	コマンドと引数を再入力してください。このエラーは、引数の入力ミスがあった場合に表示されます。
6	不明なエラー	システム管理者に問い合わせてください。

dpccli 設定ファイル

dpccli コンソール・インターフェイス を定期的起動するような状況では、よく使うコマンドライン・オプションの設定ファイルをセットアップしておくことができます。(これは、9 ページの `-i` オプションで説明する「入力ファイル」とは違います。)これにより、コマンドラインに毎回同じオプションを入力しなくても良くなります。たとえば、`-p` オプションを使って中央ネットワーク・プロキシーのネットワーク・アドレスをこのファイルに入力しておくことができます。その後、dpccli を起動するたびに設定ファイルが読み込まれ、ネットワーク・アドレスが取得されます。

注

「`.dpcclicrc`」設定ファイルは、dpccli コマンドをオペレーティング・システムのコマンド プロンプトから起動する場合にのみ参照されます。5 ページで説明されているように telnet を使用して管理対象サーバーに接続する場合、dpcclicrc ファイルは参照されません。

デフォルトで dpccli はまず HOME 環境変数 (下記参照) で指定したディレクトリで `.dpcclicrc` という名前のファイルを参照した後、現在の作業ディレクトリを参照します。`-r` オプションを使って、コマンドラインで明示的にファイル名とパスを指定することもできます。

注

dpccli コマンドラインで指定したオプション (9 ページを参照) は、設定ファイルで指定したオプションに常に優先します。`.dpcclicrc` では、すべての dpccli オプションがサポートされているわけではありません。次のオプションのみがサポートされています。

a、c⁴、I、v、i、o、p、P、s、u

⁴ 正常なシャットダウンは、National Semiconductor PC87431x 系列の「ミニ」BMC を使用するシステムではサポートされていません。

設定ファイルに含まれているコマンドテキストは処理されません。認識されないオプションやサポートされていないオプションは、そのまま無視されます。したがって、設定ファイル内には # などオプション文字以外で始まるコメントや、空白行を挿入することが可能です。

設定ファイルを作成する際、各オプションを別々の行に入力してください。各行は、ハイフンに続くオプション文字で始まっている必要があります。オプション文字に使用する引数を続けます。オプションと引数の間には空白が 1 つ必要です (例: `-s server_name`)。オプションについては、9 ページの一覧を参照してください。

HOME 環境変数の設定

注

HOME 環境変数は、他のアプリケーションによって既に使用されている場合があります。その設定を変更する前に他のアプリケーションが使用していないことを確認してください。

Linux の場合

上述のとおり、`dpccli` はデフォルトで、`.dpcclic` という名前のファイルをまず HOME 環境変数で指定されているディレクトリで参照した後、現在の作業ディレクトリを参照します。

HOME 環境変数を設定するには、次のいずれかを行います。

次回の起動時まで一時的に HOME 変数を設定するには、次のコマンドを入力します。

```
export HOME=<path>
```

恒久的に HOME 変数を設定するには、`/etc/profile` スクリプトを編集し、`export HOME=<path>` という行を追加します。

Windows の場合

デスクトップにある [マイ コンピューター] アイコンを右クリックして、[プロパティ] を選択し、[システムのプロパティ] ダイアログにアクセスします。[詳細] タブをクリックしてから、[環境変数] を選択します。ここで環境変数 HOME を追加して、設定するパスを定義します。

dpccli コマンドの構文

`dpccli` コマンドラインの構文は次のとおりです。

```
dpccli {[-?]} [-h]} {[-s server] [-u user] [-p password]
      [-i inputFile] [-o outputFile] [-c] [-I] [-v] [-P networkProxy]
      [-a alternatePort] [-r rcFile][text]...}
```

注

コマンドライン上の、コマンドライン オプションに関連付けられていない最初のテキスト (つまり上記構文中の `{text}` オプション) は、ネットワーク・プロキシに送信するテキストの開始として扱われます。したがって、このテキストは、コマンドラインの最後に置く必要があります。

注

[*-o outputFile*] オプションは、[*-i inputFile*] オプションと共に使用することを推奨します。[*-o*] 使用時に [*-i*] を使わないと、すべての出力がコンソールではなく *-o* オプションで指定したファイルに出力されるので、Intel Command Line Interface が正常に機能していてもハングしているように見えます。

dpccli コマンドライン・オプション

オプション	説明
-? または -h	コマンドの使用方法を表示します。このオプションといっしょに指定されたオプションはすべて無視されます。
-s <i>server</i>	ベースボード管理コントローラー (BMC) で使用されるネットワーク・インターフェイス カード (NIC) に関連付けられている IP アドレスまたは DNS ホスト名を指定します。 <i>server</i> として、IP アドレスまたは DNS ホスト名を入力してください。このオプションを指定しないと、この情報の入力を求められます。
-u <i>user</i>	このセッションに関連付けるインテリジェント・プラットフォーム・マネジメント・インターフェイス (IPMI) ユーザー名を指定します。 <i>user</i> として、管理対象サーバーに関連付けられている有効なユーザー名を入力してください。このオプションを指定しないと、この情報の入力を求められます。 null ユーザーとパスワードを使用している場合には、ユーザー名に "" を入力してください (例、 <code>dpccli -s server_name -u "" -p ""</code>)。
-p <i>password</i>	このセッションとユーザーに関連付けられている IPMI パスワードを指定します。 <i>password</i> として、ユーザー名に関連付けられているパスワードを入力してください。このオプションを使用しないと、この情報の入力を求められます。 null ユーザーとパスワードを使用している場合は、 <i>password</i> として "" を入力してください (例、 <code>dpccli -s server_name -u "" -p ""</code>)。
-i <i>inputFile</i>	標準入力として読み込ませる入力ファイルを指定します。 <i>inputFile</i> として、このテキスト ファイルを指定します。ファイルの終わりに達すると、-i コマンドライン・オプションがいっしょに指定されていない限り、dpccli セッションは終了します。-i オプションを使用しないと、コマンドラインからインタラクティブにテキストを入力する必要があります。ここで説明している入力ファイルとは、8 ページで説明された設定 (.dpcclic) ファイルではありません。 この表に掲載されている dpccli オプション (-u、-s、-p など) を入力ファイルの内容として入力することはできませんが、これらのオプションを [-i <i>inputFile</i>] オプションが使用されているコマンド文字列で指定することはできます。例: <code>dpccli -u user_name -p password -s server_name -i input_file_name</code>
-o <i>outputFile</i>	標準出力をキャプチャーする出力ファイルを指定します。 <i>outputFile</i> として、このテキスト ファイルを指定します。このオプションを使用しないと、すべての標準出力はコンソールに送られます。 [<i>-o outputFile</i>] オプションは、[<i>-i inputFile</i>] オプションと共に使用することを推奨します。[<i>-o</i>] 使用時に [<i>-i</i>] を使わないと、すべての出力がコンソールではなく <i>-o</i> オプションで指定したファイルに出力されるので、Intel Command Line Interface が正常に機能していてもハングしているように見えます。
-c	BMC セッションを強制的に Serial over LAN モードにします。Serial over LAN モードでは、データは変更なしで管理対象サーバーからコンソールに送られます。このコマンドライン・オプションを使用しないと、デフォルトでプラットフォーム・コントロール・モードが使用されます。 注: このコマンド オプションは、National Semiconductor PC87431x 系列の「ミニ」BMC を使用するシステムではサポートされていません。
-l	-i コマンドライン・オプションで指定された入力ファイルのすべての文字が処理された後も、dpccli セッションをインタラクティブ・セッションとして継続させます。入力ファイルのすべての文字またはコマンドラ

オプション	説明
	インで指定された文字が処理された後も、インタラクティブ・モードが継続します。これは、コマンドラインで入力ファイルまたはテキストが指定されていない場合のデフォルトモードです。
-v	セッションの進行状況メッセージを標準エラー（冗長出力）として送信させます。また、0 以外の終了条件では、エラーメッセージが出力されます。この動作は、インタラクティブ・セッション中のデフォルト動作でもあります。
-P <i>networkProxy</i>	ネットワーク・プロキシ（dpcproxy）を実行しているシステムの IP アドレスまたは DNS ホスト名を指定します。 <i>networkProxy</i> として指定した IP アドレスまたはホスト名を持つシステムは、クライアント（コンソールシステム）がネットワーク・プロキシ・サービスを受けるために接続するシステムです。この IP アドレスのデフォルト設定はローカルホスト（127.0.0.1）です。使用すべき特定ポートを指定するための -a フラグを使用していない限り、コンソールシステムはデフォルトの dpcproxy ポートである 623 経由でリモートプロキシとの通信を試みます。
-a <i>alternatePort</i>	代替ネットワーク・プロキシ・ポート番号を指定します。デフォルトのポート番号は 623 です。-p オプションを使って dpcproxy を使用することによって（詳細は 45 ページを参照）、dpcproxy がリッスンするポートを変更した場合、dpccli コマンドで -a オプションに新しいポート番号を入力しなければなりません。
-r <i>rcFile</i>	代替 dpccli 設定ファイルを指定します。dpccli は、デフォルトで、dpcclirc という名前のファイルをまず HOME 環境変数（9 ページを参照）で指定したディレクトリで参照した後、現在の作業ディレクトリを参照します。このオプションでは、ファイル名を含むパスを指定しますが、ファイル名は <i>.dpcclirc</i> 以外でもかまいません。dpccli 設定ファイルの詳細については、8 ページを参照してください。

スクリプトから dpccli コマンドを実行する

複数のサーバーから情報を取得したり、ヘルス ステータスを監視するために、ユーザーが作成したスクリプトの一部として dpccli を実行することができます。以下に、入力および出力ファイルを使用して、サーバーへのクエリーを行ったり、情報を保存した後データを解析する例を挙げます。

サンプル入力ファイル:

```
111.112.113.20
(null user name. carriage return only, no spaces or tabs)
(null password. carriage return only, no spaces or tabs)
sensors -v
get -T BMC/network/1
```

実行するスクリプト コマンド:

```
./dpccli -i inputfilename -o outputfilename
```

上記のサンプル入力ファイルから作成された出力ファイル:

```
Server: 111.112.113.20
user name:
Password:
Login successful
dpccli> sensors -v
04/08/02 | 06:56:18 | Baseboard 1.25V | ok | 1.24 | Volts
04/08/02 | 06:56:18 | Baseboard 2.5V | ok | 2.47 | Volts
04/08/02 | 06:56:18 | Baseboard 3.3V | ok | 3.29 | Volts
04/08/02 | 06:56:18 | Baseboard 3.3VSB | ok | 3.28 | Volts
04/08/02 | 06:56:18 | Baseboard 5.0V | ok | 4.97 | Volts
04/08/02 | 06:56:18 | Baseboard 12V | ok | 11.97 | Volts
04/08/02 | 06:56:18 | Baseboard -12V | ok | -11.97 | Volts
04/08/02 | 06:56:19 | Baseboard VBAT | ok | 3.07 | Volts
04/08/02 | 06:56:19 | Processor VRM | ok | 1.45 | Volts
04/08/02 | 06:56:19 | Baseboard Temp | ok | 30.00 | Celsius
04/08/02 | 06:56:19 | FntPnl Amb Temp | ok | 28.00 | Celsius
04/08/02 | 06:56:19 | Processor1 Temp | ok | 37.00 | Celsius
04/08/02 | 06:56:19 | Processor2 Temp | ok | 36.00 | Celsius
04/08/02 | 06:56:19 | PwrDstBd Temp | ok | 27.00 | Celsius
04/08/02 | 06:56:19 | PwrDstBrd Fan | ok | 7320.00 | RPM
```

```
04/08/02 | 06:56:19 | System Fan 3 | ok | 3872.00 | RPM
04/08/02 | 06:56:19 | System Fan 1 | ok | 5852.00 | RPM
dpccli> get -T BMC/network/1
IP Address:          111.112.113.20
IP Address Source:static
MAC Address:00:03:47:A4:FC:7D
Subnet Mask:         255.255.255.0
Gateway:             111.112.113.20
dpccli> exit
```

コマンド参照情報

一般的なコマンド

次の Intel Command Line Interface コマンドは、特記されているものを除き、一般的に使用されるものです。システム・ファームウェアを設定するためのコマンドについては、このセクションに続く「ファームウェア設定コマンド」のセクションを参照してください。あるコマンドがサポートされているかどうか判断するには、サーバーに付属するマニュアルを参照してください。

alarm -s

このコマンドは、電話会社のアラーム機能ハードウェア向けに特別に構成されているサーバー上でのみ使用できます。

注

このコマンドは、ベースボード・マネジメント・コントローラーのあるインテル キャリア・グレード・サーバーでのみサポートされています。このコマンドは、National Semiconductor PC87431x 系列の「ミニ」BMC を使用するシステムではサポートされていません。サポートされていないサーバーにこのコマンドを発行すると、「エラー: コマンドが無効です」というメッセージが返されます。

構文:

```
alarm -s -a id -l severity
```

説明:

-s オプションを指定すると、このコマンドは set alarm コマンドになります。このコマンドは、電話会社のアラーム・データベースに電話会社のアラームレコードを 1 つ追加します。Intel Command Line Interface のジェネレータ ID は常に 41h です。次に、新しいアラームを追加する alarm コマンドの例を示します。

```
alarm -s -a 25 -l MJR
```

オプション (すべて必須):

- s set alarm コマンドを指定します。
- a アラーム ID を設定します。
- l アラームの重大度を設定します。重要度には、MJR (重要)、MNR (軽度)、CRT (最重要) があります。

各 set alarm コマンドに続いて、次の 5 つのメッセージのいずれかが表示されます。

新しいアラームが BMC TAM アラーム・データベースに追加されました。

要求されたアラームは既存の BMC TAM アラーム・データベース・レコードに一致しています。
要求されたアラームで既存の BMC TAM アラーム・データベース・レコードを更新しました。
BMC TAM アラーム・データベースがいっぱいです。要求されたアラームレコードは優先度が低いので、破棄されました。
BMC TAM アラーム・データベースがいっぱいです。要求されたアラームレコードで既存のレコードを置き換えました。

alarm -q

このコマンドは、電話会社のアラーム機能ハードウェア向けに特別に構成されているサーバー上でのみ使用できます。

注

このコマンドは、ベースボード・マネジメント・コントローラーのあるインテル キャリア・グレード・サーバーでのみサポートされています。このコマンドは、National Semiconductor PC87431x 系列の「ミニ」BMC を使用するシステムではサポートされていません。サポートされていないプラットフォームにこのコマンドを発行すると、「BMC TAM アラーム・データベースにレコードがありません」というエラー メッセージが表示されます。

構文:

```
alarm -q [-g id [-o id] [-a id]] | [-p] | [-l severity]
```

説明:

-q オプションは、このコマンドを query alarm コマンドに設定します。このコマンドは、ユーザーが入力したオプションに基づいて、アラーム・データベース内の 電話会社の アラームレコードをクエリします。-q 以外のオプションは任意選択ですが、すべてを指定することも可能です。

オプション:

- [-q] query alarm コマンドを指定します。
- [-g] 指定したジェネレータ ID をクエリします。
- [-o] 指定したソフトウェア・オリジネーター ID をクエリします。
- [-a] アラーム ID をクエリします。
- [-p] 電源に関するアラームのみクエリします。
- [-l] 指定した重要度をクエリします。重要度には、MJR (重要)、MNR (軽度)、CRT (最重要) があります。

このコマンドでは、クエリ条件に一致するレコードがすべて表示されます。以下に、入力と出力の例を示します。

```
alarm -q -l MJR
```

AlarmGenID=4 AlarmSW=Y AlarmSWID=5 AlarmID=1 AlarmSev=MJR AlarmPWR=N
AlarmGenID=3 AlarmSW=N AlarmSWID=NA AlarmID=2 AlarmSev=MJR AlarmPWR=N
AlarmGenID=2 AlarmSW=N AlarmSWID=NA AlarmID=3 AlarmSev=MJR AlarmPWR=Y

alarm -c

このコマンドは、電話会社のアラーム機能ハードウェア向けに特別に構成されているサーバー上でのみ使用できます。

注

このコマンドは、ベースボード・マネジメント・コントローラーのあるインテル キャリア・グレード・サーバーでのみサポートされています。このコマンドは、National Semiconductor PC87431x 系列の「ミニ」BMC を使用するシステムではサポートされていません。サポートされていないプラットフォームにこのコマンドを発行すると、「BMC TAM アラーム・データベースにレコードがありません」というエラー メッセージが表示されます。

構文:

```
alarm -c [-g id [-o id] [-a id]] | [-l severity] | all
```

説明:

-c オプションは、このコマンドを clear alarm コマンドに設定します。このコマンドは、ユーザーが入力したオプションに基づいて、電話会社のアラーム・データベース内のすべての電話会社のレコードをクリアします。-c 以外のオプションは任意選択ですが、-a オプションを指定すると、-g と -o オプションも指定する必要があります。

オプション:

- [-c] clear alarm コマンドを指定します。
- [-g] 指定したジェネレーター ID のアラームをクリアします。
- [-o] 指定したソフトウェア・オリジネーター ID のアラームをクリアします。
- [-a] 指定したアラーム ID のアラームをクリアします。-a オプションを指定すると、-g と -o オプションも指定する必要があります。
- [-l] 指定した重要度のアラームをクリアします。重要度には、MJR (重要)、MNR (軽度)、CRT (最重要) があります。

このコマンドは、削除する各レコードのアラーム ID を表示します。以下に、入力と出力の例を示します。

```
alarm -c -g 4 -o 5 -a 1
Alarm ID 1 cleared (Generator ID 4)
```

boot

構文:

```
boot -s normal | service [-f] [-console]
```

説明:

IPMI 起動オプションを設定した後、システムをリセットします。デフォルトでは、boot コマンドは IPMI リセット コマンドを実行する前にオペレーティング・システムの正常なシャットダウンを試行します。指定した起動オプションが利用できない場合は、サーバーは BIOS で設定されている起動順序を使用して起動します。

注:このコマンド オプションは、National Semiconductor PC87431x 系列の「ミニ」BMC を使用するシステムではサポートされていません。

オプション :

normal	ハード ドライブからサーバーを起動します。
service	サービス・パーティションからサーバーを起動します。
[-f]	正常なシャットダウンをせずに強制的に起動させます。
[-console]	このコマンド オプションの組み合わせは、リモート サーバーに対する telnet セッションにのみ使用可能です (5 ページを参照)。IPMI リセット コマンドを正常に実行したあとで、セッションを Serial over LAN モードに切り替えます。管理対象サーバーで表示されるとおりの BIOS 出力とその他の起動メッセージが表示されます。service オプションと -c オプションをいっしょに指定すると、Intel Command Line Interface は、Serial over LAN セッションを確立する代わりに、サービス・パーティション上で実行されているリモート・サービス・エージェント (RSA) に接続します。それから、service コマンドを使って RSA と情報が交換できます (23 ページを参照)。

clearlog

構文:

clearlog

説明:

システム イベント ログをクリアします。

console

構文:

console

説明:

このコマンド オプションの組み合わせは、リモート サーバーに対する telnet セッションにのみ使用可能です (5 ページを参照)。Intel Command Line Interface をプラットフォーム・コントロール・モードから Serial over LAN コンソール・リダイレクション・モードに切り替えます。

Serial over LAN コンソール・リダイレクション・モードでは、文字ストリームは変更なしで送られるので、サーバーのコンソール シリアル ポートの出力を直接表示できます。このモードに切り替えると、Intel Command Line Interface がコマンド モードの際に受け取ってバッファされたすべての出力データが、表示されます。

チルダとピリオドを続けて入力することで (~)、Serial over LAN コンソール・リダイレクション・モードから Intel Command Line Interface コマンド モードに戻すことができます。このチルダをエスケープしてコンソールに送信するには、もう 1 つチルダを入力してください。

注

このコマンドは、National Semiconductor PC87431x 系列の「ミニ」BMC を使用するシステムではサポートされていません。

displaylog

構文:

```
displaylog [-F format] [-O filename] [-n number]
```

説明:

システム・イベント・ログ (SEL) レコードを表示します。各レコードは、次の形式で 1 行に表示されます。

```
Record # | Date Time | Sensor | Event description
```

オプション:

`[-F format]` *format* に `csv` が指定されている場合、コンマ区切りフォーマットでレコードが表示されます。

フィールドは、次の例のようにコンマで区切られます。

```
09/13/01,10:08:55,Voltage,#02,ok,5.2,Volts
```

```
09/13/01,10:08:55,Temperature,#12,critical,102,Degrees Celsius
```

`format` に入る値:

`csv`:コンマ区切りの値を指定します。

`dsv`:区切り記号による区切り (デフォルト)。上記のデフォルトの例を参照。

`hex`:16 進形式

`[-O filename]` 指定したファイルにデータを保存します。

`[-n number]` 表示する最新イベント数を指定します。このオプションを使用しないと、すべての SEL レコードが表示されます。

注

`-O filename` オプションを使って SEL ファイルを保存する場合、ファイルは `dpcproxy` が実行されているシステムに保存されます。例: リモート `dpcproxy` サーバーに接続されている場合、ファイルはローカル システムではなく、`dpcproxy` が実行されているリモート システム上に保存されます。

指定したパスは、`proxy` が実行されているシステムに存在するものでなければなりません。

exit または quit

構文:

```
exit  
quit
```

説明:

Intel® Command Line Interface を終了します。どちらのコマンドも、ネットワーク・プロキシー・ソケットの終了と、ネットワーク・プロキシーのユーザーに関連付けられているすべての IPMI セッションを終了させます。

ヘルプ

構文:

help [-C *CLIcommand*]

説明:

指定した Intel Command Line Interface コマンドの使用方法が表示されます。Intel Command Line Interface コマンドを指定しない場合には、すべての Intel Command Line Interface コマンドの簡潔な使用方法情報が表示されます。

オプション:

[-C *CLIcommand*] 有効な Intel Command Line Interface コマンド

id

構文:

id

説明:

管理対象サーバーの 16 バイトのシステム グローバル一意識別子 (GUID) を標準的な GUID 形式で表示します (例: 422e7704-23f5-4706-a943-a7859c073aed)。

Identify

注

このコマンドは、National Semiconductor PC87431x 系列の「ミニ」BMC を使用するシステムではサポートされていません。

構文:

identify [-on [*seconds*]] [-off] [-s]

説明:

LED の点滅やビープ音を使って、サーバーがその物理的な位置を知らせます。このコマンドを使えば、複数のラック サーバーの中から 1 台のサーバーを見つけられます。

オプション:

[-on [*seconds*]] LED の点滅またはビープ音の持続時間を秒数で指定します。*seconds* の数値を入力しないと、デフォルトで 15 秒に設定されます。*seconds* として 0 を入力すると、サーバーは LED の点滅またはビープ音を無限に続けます。秒数の最大値は 255 です。秒数の指定はすべてのサーバーでサポートされているわけではありません。

- [`-off`] LED の点滅またはビープ音を止めます。このオプションは、指定したサーバーが現在 LED を点滅させたり、ビープ音を鳴らしていない場合には、効果がありません。
- [`-s`] 現在の LED の状態を ON (アプリケーション)、ON (ボタン)、または OFF として表示します。

interrupt

構文:

```
interrupt -i nonmask [-console]
```

説明:

ベースボード管理コントローラー (BMC) に IPMI 診断割り込みを生成させます。

オプション:

- [`-console`] このコマンド オプションの組み合わせは、リモート サーバーに対する telnet セッションにのみ使用可能です (5 ページを参照)。IPMI 診断割り込みコマンドを実行した後、セッションを Serial over LAN モードに切り替えます。

注:このコマンド オプションは、National Semiconductor PC87431x 系列の「ミニ」BMC を使用するシステムではサポートされていません。

power

構文:

```
power {-on [-console]} | -off | -state
```

説明:

管理対象コンピューターで電源のオン/オフ手順を開始します。正常なシャットダウンを実行するには⁵、Platform Instrumentation (PI) ソフトウェアがサーバーにインストールされていなければなりません。

オプション:

- [`-console`] このコマンド オプションの組み合わせは、リモート サーバーに対する telnet セッションにのみ使用可能です (5 ページを参照)。IPMI 電源オン コマンドを正常に実行した後、セッションを Serial over LAN モードに切り替えます。

注:このコマンド オプションは、National Semiconductor PC87431x 系列の「ミニ」BMC 74

を使用するシステムではサポートされていません。

- `-state` 管理対象サーバーの現在の電源状態を表示します。

⁵正常なシャットダウンは、National Semiconductor PC87431x 系列の「ミニ」BMC を使用するシステムではサポートされていません。

リセット

構文:

reset [-console]

説明:

プラットフォームのリセットを実行します。正常なシャットダウンを実行するには、Platform Instrumentation (PI) ソフトウェアがサーバーにインストールされていなければなりません。

オプション:

[-console] このコマンド オプションの組み合わせは、リモート サーバーに対する telnet セッションにのみ使用可能です (5 ページを参照)。IPMI リセット コマンドを正常に実行したあとで、セッションを Serial over LAN モードに切り替えます。

注:このコマンド オプションは、National Semiconductor PC87431x 系列の「ミニ」BMC を使用するシステムではサポートされていません。

センサ

構文:

sensors [-v] [-F *format*] [-f *threshold*] [T *sensor*]

説明:

次の区切り文字で区切られたデフォルトのフォーマットで、プラットフォーム・センサーの現在のステータスを表示します (下記の F フォーマットを参照)。

Date | Time | Sensor Type | Sensor # | Status [| Value | Units]

オプション:

[-v] 次の例のように、利用可能なすべての情報フィールド (日付、時刻、センサー タイプなど) を表示します。

09/13/01 | 10:08:55 | Voltage | #02 | ok | 5.2 | Volts

09/13/01 | 10:08:55 | Temperature | #12 | critical | 102 | Degrees Celsius

[-F *format*] *format* に csv が指定されている場合、コンマ区切りフォーマットでレコードが表示されます。

フィールドは、次の例のようにコンマで区切られます。

09/13/01,10:08:55,Voltage,#02,ok,5.2,Volts

09/13/01,10:08:55,Temperature,#12,critical,102,Degrees Celsius

format に入る値:

csv:コンマ区切りの値を指定します。

dsv:区切り記号で区切られた値を指定します (デフォルト)。上記のコマ

ド説明の例を参照。

[*-f threshold*] *threshold* で指定したしきい値によって表示内容をフィルターします。指定したしきい値以上の値を持つすべてのセンサーが表示されます。たとえば、ok に設定すればはすべてのレベルが表示され、cr に設定すれば重大 (cr) と復旧不可 (nr) が表示されます。*threshold* には次のいずれか 1 つを指定してください。

- ok 正常な範囲で動作中
- nc 正常範囲外だが、あまり重大ではない状態
- cr センサーが指定範囲を超えており、システムにとって危険がある重大な状態
- nr ハードウェアに損傷を与える可能性がある回復不可能な状態
- us 不明な重大度の障害を示す未定義の状態

[*-T sensor*] 表示するセンサー グループを指定します。センサー グループを指定しないと、情報があるすべてのグループを表示します。*sensor* には次のうち 1 つを指定してください。

volt
temp
power
fan

service

構文:

```
service {-console | -exit | -ftp {start | stop}}
```

説明:

このコマンド オプションの組み合わせは、リモート サーバーに対する telnet セッションにのみ使用可能です (5 ページを参照)。このコマンドを使用すると、サービス・パーティションから起動した後 (service オプションを用いた boot コマンドを参照)、管理対象サーバーのサービス・パーティションから実行しているリモート・サービス・エージェント (RSA) と通信することができます。

注

このコマンドは、サービス・パーティションを持つサーバー・プラットフォームでのみサポートされます。サーバー・プラットフォームにサービス・パーティションがあるかをプラットフォームのマニュアルでご確認ください。

オプション:

-console Intel Command Line Interface セッションを RSA コンソール モードに切り替えます。RSA が起動し、コマンドライン・インタープリター パーサ経由で DOS コマンド ウィンドウ

をリダイレクトします。このモードでは、文字ストリームは変更なしで RSA に渡されます。チルダに続けてピリオドを入力する (~) ことで、コマンド モードに戻すことができます。このチルダをエスケープさせてコンソールに送信するには、もう 1 つチルダを入力してください。RSA コンソール モードから切り替えても RSA-DOS コンソール接続が中断されることはありません。また、この接続はもう 1 つ service console コマンドを発行することによって再確立することができます。

注:このコマンド オプションは、National Semiconductor PC87431x 系列の「ミニ」BMC を使用するシステムではサポートされていません。

- exit RSA-DOS コンソール接続を切断し、Intel Command Line Interface セッションを dpccli コマンド モードに戻します。
- ftp start RSA に FTP サーバーを起動させます。FTP サーバーが起動されると、標準的なオペレーティング システムの FTP クライアントを使用して、サービス・パーティションとの間で直接ファイルを転送できます。FTP クライアントは Intel Command Line Interface コマンド パーサーに組み込まれていません。また、RSA コンソール セッションがアクティブになっている間、FTP サーバーを開始することはできません。FTP サーバーを起動しようとする、Intel Command Line Interface パーサーからエラー メッセージが返されます。デフォルトの FTP ユーザー名と FTP パスワードは「ftpuser」と「ftp1234」です。
- ftp stop RSA に FTP サーバーを停止させます。

set -T session {Prompt | Prefix}

構文:

```
set -T session {Prompt=text | Prefix=text}
```

説明:

Intel Command Line Interface コマンドライン・プロンプトと、Intel Command Line Interface コマンドのレスポンスに適用されるプレフィックスを定義します。デフォルトのコマンドライン・プロンプトは「dpccli」で、デフォルトのレスポンス・プレフィックスは空白文字列です。

オプション:

prompt=text Intel Command Line Interface プロンプトを *text* に変更します。

prefix=text レスポンス・プレフィックスを *text* に変更します。

text プロンプトまたはプレフィックスのテキストです。任意のテキスト文字、またはシステム変数 \$system、\$time、\$date を入力できます。これらの変数は、それぞれホスト名または IP アドレス、システム時刻、日付に解決されます。時刻と日付は、ネットワーク・プロキシをホストしているシステムの現在時刻に対応します。

例:

```
set -T session Prompt=$system>
```

shutdown

構文:

```
shutdown [-f] [-r]
```

説明:

どちらのオプションが選択されたかによって、管理対象システムをシャットダウンまたはリセットします。デフォルトで、ソフトウェアは正常なシャットダウンを試みます⁶。正常なオペレーティング・システムのシャットダウンを行うには、独自仕様のオペレーティング・システム エージェントが必要です。エージェントがないか 7 秒以内に応答しない場合、エラー メッセージが表示されて、コマンドが終了します。この場合、リセットもシャットダウンも行われません。正常なシャットダウン・コマンドは、オペレーティング・システムのシャットダウンが終了していない場合にはハードリセットも電源オフも実行しません。このモデルは、前の正常なシャットダウン要求の実装とは異なります。

オプション:

- `[-f]` 正常なシャットダウンを実行せずに電源をオフにします。正常なシャットダウンを行うには、サーバーに Intel System Management がインストールされている必要があります。
- `[-r]` ソフトウェアに正常なシャットダウンをさせた後、IPMI リセット コマンドを実行します。

version

構文:

```
version
```

説明:

アクティブなネットワーク・プロキシ (dpcproxy) のバージョン情報を表示します。

ファームウェア設定コマンド

このセクションでは、接続先システムのファームウェアを設定するための Intel Command Line Interface コマンドについて説明します。これらのコマンドを使用すると、BMC 設定データの更新と表示が可能です。set コマンドは、BMC を不適切に設定したり、場合によっては現在のセッションの接続を失ったりする危険性があります。また、現在このシステムに接続している別のユーザーの接続を中断することもあります。したがって、このコマンドは一時的にしか引数を設定しません。また、set コマンドを使用するたびに警告が表示されます。commit コマンドを発行して、設定を BMC に強制的に入力する必要があります。また、clear コマンドを発行すればいつでも一時的な値をクリアできます。

⁶正常なシャットダウンは、National Semiconductor PC87431x 系列の「ミニ」BMC を使用するシステムではサポートされていません。

プラットフォーム別のチャンネル ID マッピング

一部の Intel Command Line Interface ファームウェア設定コマンドでは、BMC チャンネル ID 番号の入力が必要です。`get -T BMC/channelInfo` コマンドを使えば、接続先システムのチャンネル ID 情報を取得することができます。`get -T BMC/channelInfo` については、30 ページを参照してください。

また、下記のチャンネル ID 参照表 1 と 3 を使うこともできます。インテルは近年チャンネル ID のマッピングを変更いたしました。表 1 と表 2 は、以前のマッピングとそれをサポートするプラットフォームを一覧表示しています。しかも、これは包括的なリストではなく、最近のプラットフォームのみを含みます。表 3 と表 4 は、より新しいチャンネル ID マッピングとそれをサポートするプラットフォームのリストです。

注

インテル マネジメント・モジュールが実装されていない限り、National Semiconductor の PC87431 ミニベースボード管理コントローラー (mBMC) を含むシステムには 1 つしか LAN チャンネルがありません。mBMC を使用しているシステムには、インテル マネジメント・モジュールが取り付けられていないものがあります。

下記のチャンネル ID マッピングの表は、Intel Command Line Interface ファームウェア設定コマンドに関連のあるチャンネル ID のみを示しています。

表 1. 古いチャンネル ID マッピング

チャンネル番号	媒体タイプ
1	シリアル
6	NIC 2
7	NIC 1

表 2. 古いチャンネル ID マッピングを使用するプラットフォーム

プラットフォーム
SSH4
SPSH4
SRSH4
SCB2
SDS2
SE7500WV2
SHG2
SE7501WV2

プラットフォーム
SE7501BR2
SE7501HG2
SR870BN4
SR870BH2

表 3.新しいチャンネル ID マッピング

チャンネル番号	媒体タイプ
1	NIC 1
2	NIC 2
3	インテル マネジメント・モジュール - アドバンスドエディション NIC
5	シリアル

表 4.新しいチャンネル ID マッピングを使用するプラットフォーム

プラットフォーム
SE7520AF2
SE7520BD2
SE7520JR2
SE7320SP2
SE7525GP2
SE7320VP2
SE7221BK1
SR4850HW4
SR6850HW4
SE8500HW4

get -T BMC/network

構文:

```
get -T BMC/network/<channel id> [Address=mac+ip+subnet+gateway]
```

説明:

get -T BMC/network コマンドは、BMC のネットワーク設定を表示します。これには、MAC アドレス、IP アドレス、ソース (static、DHCP、BIOS、その他)、サブネット マスク、ゲートウェイ IP アドレスが含まれます。引数を指定しないと、すべてのネットワーク情報が表示されます。また、オプションでユーザーが知りたいネットワーク設定情報を指定することもできます。チャンネル ID を指定しないと、現在のチャンネルが使用されます。コマンドの詳細については 30 ページを、このガイド内のチャンネル ID マッピングの詳細については 30 ページを参照してください。

get -T BMC/channel

構文:

```
get -T BMC/channel/<channel ID>
```

説明:

get -T BMC/channel コマンドは、BMC チャンネル設定を表示します。チャンネル ID を指定しないと、現在のチャンネルが使用されます。コマンドの詳細については 30 ページを、このガイド内のチャンネル ID マッピングの詳細については 30 ページを参照してください。

get -T BMC/lanAlert

構文:

```
get -T BMC/lanAlert/<channel ID> [AlertIndex=<value>]
```

説明:

get -T BMC/lanAlert コマンドは、BMC LAN のアラート設定を表示します。チャンネル ID を指定しないと、現在のチャンネルが使用されます。コマンドの詳細については 30 ページを、このガイド内のチャンネル ID マッピングの詳細については 30 ページを参照してください。AlertIndex のデフォルト値は (0) です。

get -T BMC/lan

構文:

```
get -T BMC/lan/<channel ID>
```

説明:

get -T BMC/lan コマンドは、BMC LAN 設定を表示します。チャンネル ID を指定しないと、現在のチャンネルが使用されます。コマンドの詳細については 30 ページを、このガイド内のチャンネル ID マッピングの詳細については 30 ページを参照してください。

get -T BMC/modem

構文:

```
get -T BMC/modem/<channel ID>
```

説明:

get -T BMC/modem コマンドは、BMC モデム設定を表示します。

get -T BMC/terminal

構文:

```
get -T BMC/terminal/<channel ID>
```

説明:

get -T BMC/terminal コマンドは、BMC ターミナル設定を表示します。

get -T BMC/serialPage

構文:

```
get -T BMC/serialPage/<channel ID> [PageSelector=<value>]
```

説明:

get -T BMC/serialPage コマンドは、指定したチャンネルの BMC シリアル ページング設定を表示します。

get -T BMC/serialDialString

構文:

```
get -T BMC/serialDialString/<channel ID> DialStringIndex=<value>
```

説明:

get -T BMC/serialDialString コマンドは、指定したチャンネルのダイヤル ページとして送信されるアラートの送信先ダイヤル文字列を表示します。引数 *DialStringIndex* が必要です。

get -T BMC/serial

構文:

```
get -T BMC/serial/<channel ID>
```

説明:

get -T BMC/serial コマンドは、BMC シリアル設定を表示します。

get -T BMC/pefFilter

構文:

```
get -T BMC/pefFilter
```

説明:

get -T BMC/pefFilter コマンドは、BMC PEF 設定を表示します。チャンネル ID を指定しないと、現在のチャンネルが使用されます。コマンドの詳細については 30 ページを、このガイド内のチャンネル ID マッピングの詳細については 30 ページを参照してください。

get -T BMC/pefPolicy

構文:

```
get -T BMC/pefPolicy
```

説明:

get -T BMC/pefPolicy コマンドは、PEF ポリシー表の設定を表示します。チャンネル ID を指定しないと、現在のチャンネルが使用されます。コマンドの詳細については 30 ページを、このガイド内のチャンネル ID マッピングの詳細については 30 ページを参照してください。

get -T BMC/sol

構文:

```
get -T BMC/sol
```

説明:

get -T BMC/sol コマンドは、BMC SOL 設定を表示します。

get -T BMC/user/<user id>

構文:

```
get -T BMC/user/<user id> [ChannelID=<value>]
```

説明:

get -T BMC/user コマンドは、指定したユーザーの BMC ユーザー設定を表示します。ユーザー ID を指定しないと、現在のセッションに接続しているユーザーが表示されます。コマンドの詳細については 30 ページを、このガイド内のチャンネル ID マッピングの詳細については 30 ページを参照してください。

get -T BMC/prp

構文:

```
get -T BMC/prp
```

説明:

get -T BMC/prp コマンドは、BMC 電源設定を表示します。

get -T BMC/channelInfo

構文:

```
get -T BMC/channelInfo
```

説明:

`get -T BMC/channelInfo` コマンドは、サポートされているチャンネルおよび媒体タイプを一覧表示します。ここでは、LAN、シリアル、システム・インターフェイス (KCS)、または PCI SMBus などのチャンネルが表示されます。また、どの LAN が NIC1、NIC2、アドバンスド・カード NIC か、そして、PC87431x システムで唯一サポートされている NIC かどうかも表示します。さらに、現在接続している LAN チャンネルも一覧表示します。このコマンドは、ファームウェア設定表示またはファームウェア設定コマンドを実行する際に、表示または設定すべきチャンネル ID を決定するときに有用です。以下は、IPMI 1.5 システムからの出力サンプルです。

```

チャンネル数      媒体タイプ
-----
1                  シリアル
3                  PCI SMBus
4          System Interface
6          LAN [NIC 2]
7          LAN [NIC 1] * current channel

```

set -T BMC/channel

構文:

```
set -T BMC/channel/<channel ID> [<options>]
```

<options> に指定可能なオプション:

```

[AuthCallback=<value>]
[AuthUser=<value>]
[AuthOperator=<value>]
[AuthAdmin=<value>]
[MsgAuth=Enable|Disable]
[UserLevelAuth=Enable|Disable]
[AccessMode=Disabled|PreBoot|Always|Shared]
[PrivilegeLevel=Callback|User|Operator|Admin]

```

説明:

`set -T BMC/channel` コマンドを使用すると、ユーザーが IPMI チャンネル設定を設定することができます。チャンネルに関する以下のオプションを変更できます。チャンネル ID を指定しないと、現在のチャンネルが使用されます。

説明	名前	値
callback の認証タイプ	AuthCallback	None、Straight、MD5、MD2
ユーザーの認証タイプ	AuthUser	None、Straight、MD5、MD2

オペレーターの認証タイプ	AuthOperator	None、Straight、MD5、MD2
管理者の認証タイプ	AuthAdmin	None、Straight、MD5、MD2
メッセージごとの認証	MsgAuth	Enable、Disable
ユーザー レベルの認証	UserLevelAuth	Enable、Disable
アクセス モード	アクセス モード	Disabled、PreBoot、Always、Shared
権限レベル	PrivilegeLevel	Callback、User、Operator、Admin

set -T BMC/lanAlertEnable

構文:

```
set -T BMC/lanAlertEnable/<channel ID> GatewayIP=<ip address>
GatewayMAC=<mac address> CommunityString=<value>
BackupGatewayIP=<ip address> BackupGatewayMAC=<mac address>
```

説明:

set -T BMC/lanAlertEnable コマンドは、チャンネル上の LAN アラートを有効にするために使用します。以下のすべての引数が必要です。チャンネル ID を指定しないと、現在のチャンネルが使用されます。

説明	名前	値
ゲートウェイ IP アドレス	GatewayIP	有効な IP アドレス
ゲートウェイ MAC アドレス	ゲートウェイ MAC	有効な MAC アドレス
コミュニティー文字列	CommunityString	18 バイト以内の ASCII 文字列
バックアップ・ゲートウェイ IP	BackupGatewayIP	有効な IP アドレス
バックアップ・ゲートウェイ MAC	BackupGatewayMAC	有効な MAC アドレス

set -T BMC/lanAlert

構文:

```
set -T BMC/lanAlert/<channel ID> AlertIndex=<value> AlertIP=<ip address>
AlertMAC=<mac address> UseBackupGateway=Enable|Disable
AlertAck=Enable|Disable RetryCount=<value> RetryInterval=<value>
```

説明:

set -T BMC/lanAlert コマンドは、チャンネルに対する LAN アラートの送信先を設定するために使用します。次の引数が必要です。チャンネル ID を指定しないと、現在のチャンネルが使用されます。

説明	名前	値
アラート送信先インデックス	AlertIndex	10 進値; BMC では 0-0xF の範囲内の必要がある
アラート送信先 IP アドレス	AlertIP	有効な IP アドレス
アラート MAC アドレス	AlertMAC	有効な MAC アドレス、解決、ブロードキャスト
バックアップ・ゲートウェイの使用 (有効、無効)	UseBackupGateway	Enable, Disable
アラートの確認	AlertAck	Enable, Disable
再試行数	RetryCount	0 - 7 の 10 進値
再試行間隔	RetryInterval	1 - 255 の 10 進値

set -T BMC/lan

構文:

```
set -T BMC/lan/<channel ID> [<options>]
```

<options> に指定可能なオプション:

```
[AuthCallback=<value>]
[AuthUser=<value>]
[AuthOperator=<value>]
[AuthAdmin=<value>]
[IP=<ip address>]
[IPSource=Static|DHCP|BIOS|BMC|Other]
[Subnet=<ip address>]
[Arp=Enable|Disable]
[ArpInterval=<value>]
[GatewayIP=<ip address>]
[GatewayMAC=<mac address>]
[BackupGatewayIP=<ip address>]
[BackupGatewayMAC=<mac address>]
[CommunityString=<value>]
```

説明:

set -T BMC/lan コマンドは、上述の設定の大部分を設定するもう一つの方法です。次のすべての引数が必要です。チャンネル ID を指定しないと、現在のチャンネルが使用されます。

説明	名前	値
callback の認証タイプ	AuthCallback	None、Straight、MD5、MD2
ユーザーの認証タイプ	AuthUser	None、Straight、MD5、MD2
オペレーターの認証タイプ	AuthOperator	None、Straight、MD5、

		MD2
管理者の認証タイプ	AuthAdmin	None、Straight、MD5、MD2
IP アドレス	IP	有効な IP アドレス
IP アドレス ソース	IPSource	Static, DHCP, BIOS, BMC_Other
サブネット アドレス	サブネット	有効な IP アドレス
不要な ARP を有効にする	Arp	Enable, Disable
不要な ARP の間隔	ArpInterval	秒数
ゲートウェイ IP アドレス	GatewayIP	有効な IP アドレス
ゲートウェイ MAC アドレス	ゲートウェイ MAC	有効な MAC アドレス
バックアップ・ゲートウェイ IP	BackupGatewayIP	有効な IP アドレス
バックアップ・ゲートウェイ MAC	BackupGatewayMAC	有効な MAC アドレス
コミュニティー文字列	CommunityString	18 バイト以内の ASCII 文字列

set -T BMC/serialEnable

構文:

```
set -T BMC/serialEnable/<channel ID>
PrivilegeLevel=Callback|User|Operator|Admin
ConnectionMode=Modem|Direct BaudRate=9600|19200|38400|57600|115200
```

説明:

set -T BMC/serialEnable コマンドは、シリアル/モデム チャンネルを有効にするために使用します。次の引数が必要です。

説明	名前	値
権限レベルの制限	PrivilegeLevel	Callback, User, Operator, Admin
接続モード	ConnectionMode	Modem, Direct
ボーレート	BaudRate	9600, 19200, 38400, 57600, 115200

set -T BMC/modem

構文:

```
set -T BMC/modem/<channel ID> InitString=<value>
EscapeCommand=<value> HangupCommand=<value> DialCommand=<value>
RingDeadTime=<value> RingDuration=<value> PhoneNumber=<value>
```

説明:

set -T BMC/modem コマンドは、チャンネルのモデム設定に使用します。次の引数が必要です。

説明	名前	値
Init 文字列	InitString	Init 文字列
エスケープ コマンド	EscapeCommand	エスケープ コマンド
ハングアップ・コマンド	HangupCommand	ハングアップ・コマンド
ダイヤル コマンド	DialCommand	ダイヤル コマンド
リング デッド タイム	RingDeadTime	リング デッド タイム
リング期間	RingDuration	リング期間
システムの電話番号	PhoneNumber	システムの電話番号

set -T BMC/terminalEnable

構文:

```
set -T BMC/terminalEnable/<channel ID> LineEdit=Enable|Disable
DeleteControl=BSB|DEL Echo=Enable|Disable Handshake=Enable|Disable
OutputSeq=CRLF|NULL|CR|LFCR|LF InputSeq=CR|NULL
```

説明:

set -T BMC/terminalEnable コマンドは、シリアル チャネル上のターミナル モードを有効にするために使用します。次の引数が必要です。

説明	名前	値
ライン編集の有効化	LineEdit	Enable, Disable
コントロールの削除	DeleteControl	BSB, DEL
エコーの有効化	Echo	Enable, Disable
ハンドシェイクの有効化	Handshake	Enable, Disable
改行出カシーケンス	OutputSeq	CRLF、NULL、CR、LFCR、LF
改行入カシーケンス	InputSeq	CR、NULL

set -T BMC/serialPageEnable

構文:

```
set -T BMC/serialPageEnable/<channel ID> PageBlackout=<value>
CommunityString=<value>
```

説明:

set -T BMC/serialPageEnable コマンドは、シリアル チャネル上のシリアル ページングを有効にするために使用します。次の引数が必要です。

説明	名前	値
ページ・ブラックアウト	PageBlackout	0 - 255 の範囲の 10 進値
コミュニティー文字列	CommunityString	18 バイト以内の ASCII 文字列

set -T BMC/serialDialString

構文:

```
set -T BMC/serialDialString/<channel ID> DialStringIndex=<value>
DialString=<value>
```

説明:

set -T BMC/serialDialString コマンドは、ダイヤル ページとして送信されるアラートの宛先のダイヤル文字列を定義するために使用します。次の引数が必要です。

説明	名前	値
ダイヤル文字列インデックス	DialStringIndex	ダイヤル文字列インデックスの 10 進値
ダイヤル文字列	DialString	変数の長さの ASCII 文字列

set -T BMC/serialPageConf

構文:

```
set -T BMC/serialPageConf/<channel ID> PageSelector=<value>
DialStringSelector=<value> StopBits=1|2 DataBits=7|8
Parity=None|Odd|Even BaudRate=9600|19200|38400|57600|115200
```

説明:

set -T BMC/serialPageConf コマンドは、チャンネル上のシリアル ページの設定に使用します。次の引数が必要です。

説明	名前	値
ページの送信先セレクター	PageSelector	10 進値
ダイヤル文字列セレクター	DialStringSelector	10 進値
ストップビット	StopBits	1, 2
データビット	DataBits	7, 8
パリティ	パリティ	None, Odd, Even
ボー レート	BaudRate	9600, 19200, 38400, 57600, 115200

set -T BMC/serial

構文:

```
set -T BMC/serial/<Channel ID> [<options>]
```

<options> に指定可能なオプション:

```
[AuthCallback=<value>]  
[AuthUser=<value>]  
[AuthOperator=<value>]  
[AuthAdmin=<value>]  
[TerminalMode=Enable|Disable]  
[ConnectionMode=Modem|Direct]  
[InactivityTimeout=<value>]  
[ModemCallback=Enable|Disable]  
[CloseDCDLoss=Enable|Disable]  
[InactivityTimeoutEnabled=Enable|Disable] [BaudRate=9600|19200|38400|57600|115200]  
[DTRHangup=Enable|Disable]  
[FlowControl=None|RTSCTS|XONXOFF]  
[MUXDCDLoss=Enable|Disable]  
[MUXBaseboardBMC=Enable|Disable]  
[MUXBMCBASEBOARD=Enable|Disable]  
[PingMUX=Enable|Disable]  
[PingEnabled=Enable|Disable]  
[PingCallback=Enable|Disable] [ConnectionModeSharing=Enable|Disable]  
[RingDeadTime=<value>]  
[RingDurationTime=<value>]  
[InitString=<value>]  
[EscapeCommand=<value>]  
[HangupCommand=<value>]  
[DialCommand=<value>]  
[PageBlackoutInterval=<value>]  
[CommunityString=<value>]  
[RetryInterval=<value>]  
[LineEdit=Enable|Disable]  
[DeleteControl=BSB|DEL]  
[Echo=Enable|Disable]  
[Handshake=Enable|Disable]  
[OutputSeq=CRLF|NULL|CR|LFCR|LF]  
[InputSeq=CR|NULL]  
[PhoneNumber=<value>]
```

説明:

set -T BMC/serial コマンドは、上記の設定の多くを個別に設定するために使用できます。次のすべての引数が必要です。

説明	名前	値
callback の認証タイプ	AuthCallback	None、Straight、MD5、MD2
ユーザーの認証タイプ	AuthUser	None、Straight、MD5、MD2
オペレーターの認証タイプ	AuthOperator	None、Straight、MD5、MD2
管理者の認証タイプ	AuthAdmin	None、Straight、MD5、MD2
ターミナル モードの有効または無効	TerminalMode	Enable、Disable
接続モード	ConnectionMode	Modem、Direct
非アクティブ・タイムアウト	InactivityTimeout	0 - 450 の範囲の 10 進値
モデム対応コールバック	ModemCallback	Enable、Disable
DCD 失効時に終了	CloseDCDLoss	Enable、Disable
非アクティブ・タイムアウトの有効	InactivityTimeoutEnabled	Enable、Disable
ボー レート	BaudRate	9600、19200、38400、57600、115200
DTR ハングアップの有効	DTRHangup	Enable、Disable
フロー コントロール	FlowControl	None、RTSCTS、XONXOFF
DCD 失効時に MUX 切り替え	MUXDCDLoss	Enable、Disable
MUX ベースボードから BMC へのスイッチ	MUXBaseboardBMC	Enable、Disable
MUX BMC からベースボードへのスイッチ	MUXBMCBaseboard	Enable、Disable
MUX スイッチ前に Ping	PingMUX	Enable、Disable
Ping の有効化	PingEnabled	Enable、Disable
Callback 中の Ping	PingCallback	Enable、Disable
接続モード文字列	ConnectionModeSharing	Enable、Disable
リング デッド タイム	RingDeadTime	0 - 7999 の 10 進値
リング期間	RingDurationTime	0 - 31000 の 10 進値
モデム init 文字列	InitString	変数の長さの ASCII 文字列
モデム・エスケープ・コマンド	EscapeCommand	変数の長さの ASCII 文字列
モデム・ハンガアップ・コマンド	HangupCommand	変数の長さの ASCII 文字列
モデム・ダイヤル・コマンド	DialCommand	変数の長さの ASCII 文字列
ページ・ブラックアウト間隔	PageBlackoutInterval	0 - 255 の範囲の 10 進値
コミュニティー文字列	CommunityString	18 バイト以内の ASCII 文字列

呼び出し再試行間隔	RetryInterval	0 - 255 の範囲の 10 進値
ターミナル ライン編集の有効	LineEdit	Enable, Disable
ターミナル削除コントロール	DeleteControl	BSB, DEL
ターミナル エコーの有効	Echo	Enable, Disable
ターミナル ハンドシェイクの有効	Handshake	Enable, Disable
ターミナル改行出力シーケンス	OutputSeq	CRLF、NULL、CR、LFCR、LF
ターミナル改行入力シーケンス	InputSeq	CR、NULL
システムの電話番号	PhoneNumber	32 バイト以内の数値文字列、「(」、「)」、「-」、「」も使用可能

set -T BMC/pefFilter

構文:

```
set -T BMC/pefFilter/<FilterTableIndex>
Actions=DIAGINT | PCYCLE | RESET | PDDOWN | ALERT | NONE
PolicyNumber=<value>
```

説明:

set -T BMC/pefFilter コマンドは、PEF フィルターの設定に使用されます。次の引数が必要です。

説明	名前	値
アクション	アクション	DIAGINT PCYCLE RESET PDOWN ALERT NONE
ポリシー番号	PolicyNumber	10 進値

set -T BMC/pefPolicy

構文:

```
set -T BMC/pefPolicy/<PolicyTableIndex >
PolicyEnabled=Enable | Disable PolicyNumber=<value>
Policy=ALWAYS | NEXT_E | STOP | NEXT_C | NEXT_T ChannelID=<value>
DestinationTable=<value>
```

説明:

set -T BMC/pefPolicy コマンドは、イベントフィルターで定義されたイベントが起こったときに実行するアクションを管理する、PEF ポリシー表の項目を設定するために使用します。次の引数が必要です。

説明	名前	値
有効にされたポリシー	PolicyEnabled	Enable Disable

説明	名前	値
ポリシー番号	PolicyNumber	10 進値
ポリシー	ポリシー	ALWAYS、NEXT_E、STOP、NEXT_C、NEXT_T
チャンネル数	ChannelID	10 進値
送信先の表インデックス	DestinationTable	10 進値

set -T BMC/solEnable

構文:

```
set -T BMC/solEnable SOL=Enable|Disable
PrivilegeLevel=User|Operator|Admin
BaudRate=9600|19200|38400|57600|115200 RetryCount=<value>
RetryInterval=<value>
```

説明:

set -T BMC/solEnable コマンドは、Serial over LAN (SOL) の設定に使用します。mBMC システムでは SOL はサポートされていないので、mBMC システムでこのコマンドを入力すると、指定されたコマンドはサポートされていないという内容のメッセージが返されます。次の引数が必要です。

説明	名前	値
有効または無効	SOL	Enable, Disable
権限レベル	PrivilegeLevel	User, Operator, Admin
ボーレート	BaudRate	9600, 19200, 38400, 57600, 115200
再試行数	RetryCount	10 進値
再試行間隔	RetryInterval	1 -255 の範囲の 10 進値

set -T BMC/user

構文:

```
set -T BMC/user/<user id> UserName=<value> Password=<value>
```

説明:

set -T BMC/user コマンドは、ユーザーの設定に使用します。次の引数が必要です。ユーザー ID を指定しないと、現在のセッションに接続しているユーザーが使用されます。

説明	名前	値
ユーザー名	UserName	ASCII 文字列
Password	Password	ASCII 文字列

set -T BMC/userPrivilege

構文:

```
set -T BMC/userPrivilege/<user id> ChannelID=<value>  
PrivilegeLevel=Callback|User|Operator|Admin|None
```

説明:

set -T BMC/userPrivilege コマンドは、ユーザーのアクセス設定をチャンネルごとに設定するために使用されます。チャンネルの権限レベルはユーザーの権限レベルに優先します。次の引数が必要です。ユーザー ID を指定しないと、現在のセッションに接続しているユーザーが使用されます。

説明	名前	値
チャンネル ID	ChannelID	10 進値
権限レベルの制限	PrivilegeLevel	Callback, User, Operator, Admin, None

set -T BMC/userEnable

構文:

```
set -T BMC/userEnable/<user id> UserStatus=Enable|Disable
```

set -T BMC/userEnable コマンドは、ユーザーを有効または無効にするために使用します。次の引数が必要です。ユーザー ID を指定しないと、現在のセッションに接続しているユーザーが使用されます。

説明	名前	値
ユーザーのステータス	UserStatus	Enable Disable

set -T BMC/prp

構文:

```
set -T BMC/prp PowerRestorePolicy=Off|On|Restore
```

説明:

set -T BMC/prp コマンドは、サーバー管理ファームウェアで電源設定を設定するために使用します。次の引数が必要です。

説明	名前	値
電源復旧ポリシー	PowerRestorePolicy	Off, On, Restore

commit

構文:

```
commit
```

説明:

commit コマンドは、上記のコマンドで設定されたすべての一時的な値を恒久的に設定します。何らかの原因で値の設定に失敗すると、何度でも継続的に設定を試みます。値の設定により接続が失われた場合は、セッションの再確立を試みて残りの値を設定します。再試行に失敗すると、値は設定されずに残りの一時的な値は失われます。

clear**構文:**

clear

説明:

clear コマンドは、上記のコマンドで設定されたすべての一時的な値をクリアします。

ネットワーク・プロキシー (dpcproxy) について

インストール・プログラムにより、Intel Command Line Interface と Serial over LAN⁷ を有効にするネットワーク・プロキシーが自動的にインストールされて開始されます。このプロキシーは *dpcproxy* という名前です。通常これは何もしなくても、再起動時に自動的に実行を開始します。このプロキシーは、デフォルトで、コマンドラインに何の引数が入力されていない状態で開始しますが、*dpcproxy* が自動的に起動する際に毎回読み取られる *persistent* 引数は、変更が可能です (*dpcproxy* のコマンドライン引数の詳細については、45 ページを参照してください)。また、インストールされているネットワーク・プロキシーを手動で起動および停止して、実行中かどうか確認することも可能です。

このような操作は、オペレーティング・システムごとに次のセクションで説明されます。

注

ネットワーク・プロキシーは 1 つの実行ファイルとしてインストールされ (Windows では *dpcproxy.exe*、Linux では *dpcproxy*)、任意のディレクトリーから実行可能です。デフォルト・クライアント・ポートの 623 が権限を与えられたポートになります。-p コマンドライン・オプションを使ってポートを変更しない限り (45 ページの表を参照)、プロキシーの起動には *root/administrative* 権限が必要です。ネットワーク・プロキシーは各管理対象サーバーにローカルにインストールすることも、中央プロキシーサーバーにインストールすることもできます。

ネットワーク・プロキシー用の Persistent 引数を変更する

デフォルトでは、ネットワーク・プロキシーはコマンドライン引数のない状態で起動します (*dpcproxy* のコマンドライン引数の詳細については、45 ページを参照してください)。ネットワーク・プロキシーの自動起動プロセス用の引数を追加することも可能です。これは、システムを再起動するたびに読み込まれます。つまりシステムの起動ごとに持続されるということです。この変更を有効にするには、ネットワーク・プロキシーを再起動しなければなりません。サーバーを再起動したくない場合には、ネットワーク・プロキシーを手動で再起動してください。

⁷ Serial over LAN モードは、National Semiconductor PC87431x 系列の「ミニ」BMC を使用するシステムではサポートされていません。

Windows の場合

現在の persistent 引数を表示するには、コマンド プロンプトで次のコマンドを発行します。

```
dpcproxy -viewarg
```

ネットワーク・プロキシの persistent 引数を変更するには、コマンド プロンプトで次のコマンドを発行します。

```
dpcproxy -argchg arguments
```

次に例を示します。

```
dpcproxy -argchg -p 623
```

dpcproxy コマンドラインの構文および有効な引数の詳細については、45 ページを参照してください。

Linux の場合

/etc/rc.d/init.d/cliservice ファイルを編集して、ファイル内の dpcproxy コマンドのコマンドライン引数を指定します。cliservice ファイルに与えられた引数は、再起動時にネットワーク・プロキシが再度開始するたびに使用されます。この変更を有効にするには、ネットワーク・プロキシを再起動しなければなりません。サーバーを再起動したくない場合には、ネットワーク・プロキシを手動で再起動してください。

コマンドライン引数を追加するには、/etc/rc.d/init.d/cliservice ファイル内にある次の行 /usr/local/cli/dpcproxy に、45 ページの構文の表から必要なオプションを追加して編集します。次は編集した cliservice コマンド ファイルの例です (dpcproxy のコマンドライン引数の詳細については、45 ページを参照してください)。

```
/usr/local/cli/dpcproxy -p 623 -e
```

インストールしたネットワーク・プロキシを手動で起動する

(意図的にまたは問題があるために) インストールした dpcproxy のサービス/デーモンが現在停止されており、システムを再起動せずにそのサービス/デーモンを再起動したい場合は、次の方法のいずれかを使用します。

Windows の場合

Windows からは、次のいずれかの方法を使ってネットワーク・プロキシを起動、停止、確認することができます。

サービス・コントローラー・マネージャーを使ってプロキシのステータス表示、起動、停止が行えます。

[コントロール パネル] から [管理ツール] ウィンドウを開きます。[サービス] をダブルクリックします。[サービス] ウィンドウから、そのサービスの停止、開始、およびプロパティの変更が行えます。

コマンドプロンプトから、引数なしの `net start` コマンドを使用して現在実行中のサービスを一覧表示できます。サービスを開始・停止するには、次のコマンドを使います（下の `net start` コマンドの一部として `dpcproxy` コマンドライン引数を与えることはできません）。

```
net start dpcproxy
net stop dpcproxy
```

Linux の場合

Linux コンソールからは、次のようにネットワーク・プロキシの起動、停止、確認を行えます。

次のコマンドでプロキシが実行中か確認できます。

```
/etc/rc.d/init.d/cliservice status
```

プロキシが実行していない場合、次のコマンドで起動できます。

```
/etc/rc.d/init.d/cliservice start
```

プロキシが実行している場合、次のコマンドで停止できます。

```
/etc/rc.d/init.d/cliservice stop
```

プロキシが現在実行している場合、次のコマンドで再起動できます。

```
/etc/rc.d/init.d/cliservice restart
```

dpcproxy コマンドの構文

`dpcproxy` コマンドは、プロキシ サービスのインストール、アンインストール、または引数の変更に使います。`dpccli` コマンドは、ユーザーをプロキシ サービスに接続して、コマンド ウィンドウを開きます。`dpccli` コマンドの詳細については 9 ページの `dpccli` コマンドの構文 を参照してください。

通常、`dpcproxy` コマンドを入力する必要はありません。インストール プロセスがプロキシを自動的にサービスまたはデーモンとして開始するからです。しかし、サービスを再開または再インストールする場合、または `persistent` 引数を自動的にサービス/デーモンに与える場合（43 ページを参照）、ここで説明するコマンド構文を使用します。

コマンドライン構文を以下に示します。各オプションは以下の表で説明されています。

```
dpcproxy {[-?] [-h]}|{-f [-p port] [-L] [-l language] [-d logfiledir] [-u] [-nv] [-e] [-la attempts]}|{-argchg arguments| -viewarg}|
{-redirectexit exit characters}|{-encrypt [ALL | NONE]}|{-a | -g | -s |
{-install [arguments] | -uninstall}}
```

例 :

```
dpcproxy -install -encrypt ALL (Windows にプロキシをインストールします)
```

```
dpcproxy -f -p 9001
```

```
dpcproxy -argchg -d C:/dpccli.log
```

注

-install および -uninstall オプションは Windows でのみ使用できます。これは、ネットワーク・プロキシが Windows サービスとして正式にインストールされているからです。さらに、-argchg および -viewarg オプションも Windows にのみ適用されます (下の表を参照)。

dpcproxy コマンドライン オプション

オプション	説明																																				
-? または -h	使用方法を表示してから終了します。どちらかのオプションを指定すると、他のすべてのオプションおよび入力テキストは無視されます。																																				
-f	ネットワーク・プロキシをフォアグラウンドで実行します。-?、-h、-argchg、-viewarg、-install、または -uninstall オプションのみを使用する場合を除き、 コマンド プロンプトで入力する必要があります 。たとえば、dpcproxy -f -p 623 のようになります。Windows Service Control Manager または Linux script cliservice でオプションを入力する場合、-f オプションは 使用できません 。																																				
-p <i>port</i>	ネットワーク・プロキシが着信クライアント接続をリッスンする代替ポートを指定します。ネットワーク・プロキシは、デフォルトで、ポート 623 をリッスンします。これはほとんどのオペレーティング・システムで権限を与えられているポートです。																																				
-L	ネットワーク・プロキシがローカル・ホスト・アドレス (127.0.0.1) からの接続のみを受け入れるようにします。このオプションは、ネットワーク・プロキシのインスタンスがローカル システム以外のシステムへサービスを提供するのを防ぎます。																																				
-l <i>language</i>	<p>ネットワーク・プロキシ・クライアントに送信するメッセージおよび日付をローカライズします (特定言語で表示します)。このオプションを使用しないと、ネットワーク・プロキシはオペレーティング・システムの言語を検出します。コマンドラインで言語が指定されず、検出言語が Intel Command Line Interface でサポートされていない場合のネットワーク・プロキシのデフォルト言語は英語です。次のコードを使用して言語を設定してください (最初の値が Linux 用で、次の値が Windows 用です)。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>Linux</th> <th>Windows</th> <th>言語</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>en_US</td> <td>enu</td> <td>英語</td> </tr> <tr> <td>de_DE</td> <td>deu</td> <td>ドイツ語</td> </tr> <tr> <td>es_ES</td> <td>esp</td> <td>スペイン語</td> </tr> <tr> <td>zh_CN</td> <td>chs</td> <td>中国語 (簡体字)</td> </tr> <tr> <td>fr_FR</td> <td>fra</td> <td>フランス語</td> </tr> <tr> <td>pt_BR</td> <td>ptb</td> <td>ポルトガル語 (ブラジル)</td> </tr> <tr> <td>zh_TW</td> <td>cht</td> <td>中国語 (繁体字)</td> </tr> <tr> <td>it_IT</td> <td>ita</td> <td>イタリア語</td> </tr> <tr> <td>ru_RU</td> <td>rus</td> <td>ロシア語</td> </tr> <tr> <td>ja_JP</td> <td>jpn</td> <td>日本語</td> </tr> <tr> <td>ko_KO</td> <td>kor</td> <td>韓国語</td> </tr> </tbody> </table>	Linux	Windows	言語	en_US	enu	英語	de_DE	deu	ドイツ語	es_ES	esp	スペイン語	zh_CN	chs	中国語 (簡体字)	fr_FR	fra	フランス語	pt_BR	ptb	ポルトガル語 (ブラジル)	zh_TW	cht	中国語 (繁体字)	it_IT	ita	イタリア語	ru_RU	rus	ロシア語	ja_JP	jpn	日本語	ko_KO	kor	韓国語
Linux	Windows	言語																																			
en_US	enu	英語																																			
de_DE	deu	ドイツ語																																			
es_ES	esp	スペイン語																																			
zh_CN	chs	中国語 (簡体字)																																			
fr_FR	fra	フランス語																																			
pt_BR	ptb	ポルトガル語 (ブラジル)																																			
zh_TW	cht	中国語 (繁体字)																																			
it_IT	ita	イタリア語																																			
ru_RU	rus	ロシア語																																			
ja_JP	jpn	日本語																																			
ko_KO	kor	韓国語																																			
-d <i>logfiledir</i>	デバッグ ログ ファイルを <i>logfiledir</i> ディレクトリに保存します。このオプションを使用しないと、デバッグ情報は保存されません。																																				
-u	dpcproxy のこのインスタンスに対して Serial over LAN のデータの暗号化をオフにします。暗号化がオフになった状態では、LAN 経由で転送されるすべてのシリアル データは暗号化されずに送信されます。																																				

オプション	説明
	注: このコマンド オプションは、National Semiconductor PC87431x 系列の「ミニ」BMC を使用するシステムではサポートされていません。
-nv	非冗長モードを設定します。クライアントにメッセージを返さずに、コマンドからのデータのみが返されます。
-e	「エラー後に終了」を設定します。エラーが発生すると、クライアント セッションを終了します。
-la <i>attempts</i>	ログオンの試行許可回数を設定します。-e も指定すると、-la 引数は無視され、最初に失敗した段階でセッションが終了します。< <i>attempts</i> > は、失敗するまでの試行回数です。
-argchg <i>arguments</i>	Windows のみ。 dpcproxy サービスの起動引数を恒久的に変更します。この引数は、再起動時に起動される際に dpcproxy コマンドで使用されるコマンドライン・オプションです。この変更を有効にするには、ネットワーク・プロキシを停止してから再起動するか、プロキシが実行されているサーバーを再起動する必要があります。有効な引数は、この表の -p、-L、-l、-d、-u、-nv、-e、-la です。コマンドラインで指定された引数のみが保存されます。保存されていた引数はすべてクリアされます。たとえば、-p および -u オプションが現在保存されていて、-argchg -d を入力した場合、-p および -u 引数はクリアされて、-argchg -d 引数のみが保存されます。保存されている引数をすべてをクリアするには、引数なしで -argchg オプションを入力してください。
-viewarg	Windows のみ。 再起動時にサービスが開始された際に dpcproxy コマンドで使用される現在の persistent 引数を一覧表示します。
-redirectexit <i>exit characters</i>	SOL モードを終了する文字シーケンスを変更します。デフォルトの 2 文字はチルダ+ピリオド (~.) です。モード切り替えの詳細については、6 ページを参照してください。 <i>exit characters</i> 引数は、正確に 2 文字の長さである必要があります。
-encrypt [ALL NONE]	暗号化する IPMI パケットを設定します。暗号化を ALL に設定すると、IPMI パケットはすべて暗号化されます。暗号化を NONE に設定すると、IPMI パケットはどれも暗号化されません。このオプションを設定しない場合には、認証されたパケットのみが暗号化されます。このオプションは、SOL パケットの暗号化を設定する -u オプションには影響を与えません。
-a	Linux のみ。 BMC への現在の接続でローカル Linux ARP テーブルのエントリをアクティブな状態に保ちます。BMC が ARP 要求に応答できない場合（通常 BMC 上の不要な ARP 間隔の増加による）、プロキシは Linux OS がこのエントリを非アクティブにするのを防ぎます。この引数は、プロキシが BMC と同じサブネット上にある場合にのみ機能します。
-g	Linux のみ。 OS またはスイッチからの ARP 要求に対し、BMC の代わりにプロキシに応答させます。これは、BMC への接続を現在処理中のプロキシである必要はありません。この引数は、プロキシが BMC と同じサブネット上にある場合にのみ機能します。ただし、これらの BMC への接続を行っているプロキシは別のサブネットにあってもかまいません。
-s	プロンプトを dpccli> から接続試行中に入力されたサーバー名または IP アドレスに変更します。
-install [<i>arguments</i>]	Windows のみ。 プロキシを Windows サービスとしてインストールします。このオプションは Windows 環境でのみ使用可能です。また、プロキシが起動されるたびに別のオプションが使用されるように指定することもできます。必要に応じて -install オプションの後に別のオプションを入力してください。有効な引数は、この表の -p、-L、-l、-d、-u、-nv、-e、-la です。インストールされると、サービスはシステムが起動するたびに自動的に（指定したオプションで）開始します。 注: -install オプションを使用する場合、現在の作業ディレクトリは dpcproxy.exe ファイルがあるディレクトリでなければなりません。つまり、dpcproxy -install コマンドを dpcproxy.exe ファイルがあるディレクトリから実行する必要があります。プロキシ サービスは、現在の作業ディレクトリを指定する実行ファイルのパスにインストールされます。したがって、作業ディレクトリが c:\mypath であり、dpcproxy.exe ファイルが c:\different_path にある場合には、サービスは dpcproxy.exe ファイルを c:\mypath で参照するので、見つけることができなくなります。
-uninstall	Windows のみ。 プロキシを Windows Service Control Manager データベースから削除します。このオ

オプション	説明
	<p>オプションは Windows 環境でのみ使用可能です。削除後、プロキシはインストール済みサービスではなくなります。アンインストールする前に、サービスが停止されていることを確認してください。</p> <p>注:実行中のオペレーティング・システムのバージョンによっては、サービスを完全に削除するためにシステムの再起動が必要になります。</p>